

リアリズムの国際政治学

神谷不二先生が大阪市立大学を離れ、慶應義塾大学法学部で教鞭をとったのは、昭和四十五年四月のことであった。その当時、神谷先生はすでに『朝鮮戦争―米中対立の原形』や『現代国際政治の視角』を刊行して、日本で最も脚光を浴びる国際政治学者の一人であった。他方、私は修士課程第二学年の学生であり、石川忠雄教授の指導下で朝鮮研究に着手したばかりであった。

神谷先生の来塾はまったく予期せざることであったが、当然のように、私は石川研究会から神谷研究会に移籍させられた。神谷先生を法学部に招聘したのは石川教授だったからである。石川教授はそれが私のためだと考えたようである。また、神谷先生が単身で大阪から赴任したのだから、慶應での研究と教育を補佐する大学院生が必要だと考えたかもしれない。私の立場は多数の先輩を抱える石川研究会の末席から神谷研究会の最先任に急変することになった。

しかし、神谷先生の下で国際政治研究の手ほどきを受けたことは、若い学徒にとつて、たいへんに幸運なことであった。なぜならば、当時は深く考えなかったが、朝鮮半島研究は国内政治研究だけで完結する性質のものでなかったからである。言い換えれば、神谷教授との出会いは、私に国際政治と国内政治のリンケージという新しい研究テーマを与えてくれたのである。後年のフルブライト留学も、先生に励まされたことであった。

また、働き盛りの神谷教授は、当時、大学で教鞭をとるだけでなく、日本国際問題研究所、平和安全保障研究所、内閣外交政策懇談会、防衛庁防衛政策懇談会、日米欧委員会の活動やさまざまな国際会議に積極的に参加し、新聞や雑誌にも頻繁に登場した。米ソ関係、日米関係、ベトナム戦争、朝鮮半島問題、沖縄返還などを題材に、イデオロギーや理想主義に慣れた論壇でリアリズムの重要性を訴えたのである。そのような新しいタイプの学者の姿を身近で拝見することによって、私は自分の知見を広げることができたのである。

いま思えば、神谷流の国際政治学の支柱になっていたのは、外交史学でも国際政治理論でもなかったように思う。神谷流は人間性に関する深い洞察を基礎にしていた。

先生は冗長な表現を嫌って、「寸鉄人を刺す」ことを好んだ。最新の理論よりも中国の古典を引用したし、「国際政治学は大人の学問だ」「日本には……史はあっても、……論がない」と言うのが口癖であった。また、ご自分を「長編作家」ではなく、「短編作家」と心得ていた。

リアリズムの国際政治学は確かに大人の学問である。そのことを教える論客が少なくなるなかで、先生は東西冷戦や日米関係の「語り部」を自称して、八十二歳になっても旺盛に執筆活動を続けた。まさに「鉄人」と言ってもよい。何の前触れもなく心不全に倒れたが、その直前まで机に向かっていたのだから、神谷先生らしい大往生であった。

心から恩師のご冥福を祈る。

法学部教授 小此木 政夫

政軍関係

神谷不二先生には平成二二年二月二〇日未明に急逝された。享年八二であった。翌週以降の予定も入っており、その日も平生と変わらぬ様子で、寝につくまで執筆をされていた由である。心不全での突然の逝去であった。昭和四五年に石川忠雄先生の招聘によって大阪市立大学から本塾大学法学部に転じられたが、私が先生の警咳に接したのは昭和四八年からである。以来三六年にわたって薫陶を受けることになった。厳しく愉快な学部ゼミでの時間は得難い経験だった。その学恩は計り知れない。

若い頃、先生の著作でもっとも影響を受けたものは、「トルーマンとマッカーサー」朝鮮戦争指導の「一面」(一九六四年) および「政軍関係に関する一考察—シヴィリアン・コントロールについて」(一九六三年)である。顧みれば、神谷先生が先鞭をつけられた、政策と戦略の分析、ならびにそれらが遂行されるプロセスでの政軍関係をめぐるテーマに、同門の一人として、説いて尽

くせぬ憾みを残しつつ、非才を顧みず三〇年携わってきた。

前者は、アメリカの政軍関係の特異な歴史に胚胎する戦争観と、誰にとっても未知であった核時代黎明期の戦争としての朝鮮戦争がどのように交錯しつつ、新しい時代の新しい戦争を生み出していったかを、周到な研究に基づいて、緊張感あふれる筆致で活写した傑作であると思う。後者は、そもそも「Civil-Military Relations」に「政軍関係」という言葉を初めて与えた記念すべき論文である。我が国において戦前と同様戦後においても軍勢力の近代的あり方に対する理解が欠如していることへの鋭い指摘、軍に対する文民ないし議會の制度的優越が、必ずしもすぐれた外政・戦争指導を自明に保証するものではないとの主張に、衝撃を受けたことを鮮やかに記憶している。

最後に先生と長時間話し込んだのは、平成一九年六月一五日に東京倶楽部でお目にかかり、塾の創立一五〇周年記念の「復活！ 慶應義塾の名講義」への登壇をお願いした時であった。話題は徒然に先生が最初のアメリカ留学からの帰路ヨーロッパを周遊し、マルセイユから日本郵船隅田丸で帰国した船旅の思い出やら、近時の六カ国

協議、朝鮮戦争研究の現況など多岐にわたった。その折に初めて先生から、留学先のコロンビア大学で、研究室がサミュエル・ハンチントン教授と隣り合わせであったことを伺った。ハンチントン教授も一九二七（昭和二年）生まれ、神谷先生と同じ年であったが、先生より二ヵ月早く逝去された。

平成一九年二月一五日に三田五一七番教室で行われた「日本の国家戦略」と題する講義にはゼミの卒業生を中心に多数が参集し、大盛況であった。かつて同じ教室に集った多くの仲間とともに久方ぶりに先生の話を聴くことができたことは、まことに幸運であった。期せずしてその日が最後の講義となった。

法学部教授 赤木完爾

神谷不二先生を偲んで

私が神谷先生の研究室のドアを叩くようになったきっかけは、先生の『朝鮮戦争』（中公新書）を読んだことであつた。今では信じ難いことだが、私が韓国から来た一九六〇年代初めの日本社会には、朝鮮戦争は米韓の「北侵」で始まったとする見方が一部に依然根強かつた。古書店では、米韓挑発説を巧みに組み立てた、I・F・ストーンの『秘史・朝鮮戦争』（新評論社版）が、「これを読んで目が覚めないものを白痴というのであろう」という清水幾太郎の評を帯にして売られていた。西側の一員として繁栄している日本でのこのような状況は、この戦争を体験した私には不思議でたまらず、奇怪にさえ思えた。そんなときに出会つたのが、誤つた朝鮮戦争観を正した前記の『朝鮮戦争』であり、先生のお名前は尊敬の念とともに記憶に強く残つた。そのため、後に私が遅まきながら研究者の道を選んだ際は、半ば当然のように、神谷先生のご指導を受けることを目指し、七六年に大学

院（法研・博士）に入学してそれが実現したのである。

大学院では、先生に直接あるいは見よう見まねで、実証性や正確性など研究の基本を教わつた。また、先生は社会的マナーに厳格だったので、私はこの面でも多くのことを学んだ。話は変わるが、神谷先生を語るとき真つ先に頭に浮かぶのは、就職の問題で大変ご心配をおかけしたことである。私はこの問題への先生のお心遣いに、涙が出るほど感動したことがある。私は八四年に学位を取得したものの、就職は五里霧中の状態であつた。年齢が五〇歳目前の上に外国籍ということもあつて、教職の狭き門はまさに駱駝にとつての「針の穴」に等しかつた。そのようなある日、突然先生から電話がかかつて、S大で教員公募があるらしいから至急履歴書を持って研究室に来るように言われた。そこで、指示された通りに三田の研究室に駆けつけると、ちょうど先生も私の推薦書を書き上げたところだつた。先生は、封をする前にその内容を読み聞かせてくださったが、そこには一般的な推薦辞に続いて次のような下りがあつた。「なお、人物については私の人格を賭けて保証します」。もちろんこれは、この無策の門弟になんとか働き口を見つけてやりたいという、先生の熱い思いから出たお言葉であつたが、私は

今でもこのことを思うと胸に迫るものがある。ちなみに、このときの応募は実を結ばなかったが、私が二〇〇五年に定年退職するまで勤めた帝京大学の場合も、先生のお目配りで非常勤に就いたのが始まりであった。私にとって神谷先生は師であると同時に、意識の上では後見者のような存在でもあった。

神谷先生がお亡くなりになるまで、私はほぼ月に一回、先生が座長を務める研究会でお目にかかっていた。今年の最初の研究会は一月十九日だったが、先生はいつものようにお元気で会を主宰された。その後、近くのレストランで開かれた「新年会」でも、私が「最近食欲はいかがですか」と伺ったら、「何でもよく食べます」とのお返事だった。研究会の後はいつも先生と近くの地下鉄の駅まで歩き、そこでお別れしていたが、この日も、歩調がややスローペースになられた先生に伴って地下鉄の駅まで行き、改札口でお見送りしたが、これが先生との最後のお別れになってしまった。二月二三日は先生のお通夜が営まれたが、本来ならこの日は二月の研究会が開かれて、私は隣で先生のお話に耳を傾けていたはずだった。

神谷先生、ありがとうございました。謹んでご冥福を

お祈り申し上げます。

元帝京大学教授

群馬県立女子大学非常勤講師

呉

忠
根

師の回想

「君の指導は一年間行わないから。その間にどのくらい本を読んだかですべてが決まると思う。」修士課程に進学した四月早々に新研一階の談話室で神谷不二先生からそう告げられました。論客として活躍中の先生は、さすがに厳しいというのが私の第一印象でした。

神谷先生が塾に赴任なさったのは、私が四年生になる春でした。当時の私は、池井優先生のゼミでお世話になっておりました。池井先生に大学院に進学したい旨を申し上げますと、「自分はまだ助教で、院生の指導教授にはなれない。神谷先生によく頼んでおくから」と言われました。それが神谷先生にご指導いただくことになるきっかけでした。

修士課程の二年目を迎える時に、神谷先生からゼミを手伝うようにと言われました。ゼミは、先生の出席される本ゼミと私が任されるサブゼミとがありました。本ゼミでは、先生の横に私が座り、ゼミ生の報告の評価、学

生からの質問の引き出し、質問への返答、それに先生へのコメントを求めること等を行わなければなりません。そのため準備も大変なことでしたが、精神的にはもつと大変でした。それは、本ゼミの度に私が先生に評価される試験を受けさせられているような心境にあったからです。

とはいえ、そんな緊張感のあるゼミの中で得られた何物にも代えがたいこと、換言すれば私にとって貴重な財産となったことは、本ゼミの時の神谷先生の学生に対するコメントや課題等に対する意見を聞かせていただきながら、国際関係を冷静に実証的にみる目を養わせていただく機会を与えられたことです。それは、芸を盗むという表現と通ずるものがあつたかと思えます。また先生の自らの言論に対する毅然とした姿勢も、研究者の端くれとして自分がどうあらねばならないかについての示唆をいただきました。

私は、神谷先生にレポートや原稿を読んでもいただいた、或いはご意見やご指摘をいただいたといった経験がありません。先生は、そういう指導のされ方はなさりませんでした。おそらく他の門下生も同様だと思います。いつでしたか、研究職についた門下生が先生を囲んで食事をす

る機会がありました。その際の挨拶の中で、私が「神谷先生のご指導により」云々と型通りの感謝の言葉を述べましたところ、先生が「私は皆さんを指導した覚えはない」とおっしゃいました。私は、そういうストレートな言い方自体が先生らしい誠実さを示すものという印象を抱いた記憶があります。そういう席上で、先生が門下生に向かって世界で通用する人間になるようにとよくおっしゃっておられました。私の場合には、先生の期待に応えるにはまだ道遠い不肖の弟子で恐縮に思います。

神谷先生は、ゼミ生に対して勉強は勿論、礼儀や振舞等に対しても格別厳しかったと思います。ゼミ生の出した賀状に対しても何かありますと必ず注意なさいました。今の私は、自分のゼミの学生に対してついつい面倒で、先生のように注意を与えておりません。当時は、失礼ながら随分うるさい先生と想ったこともありました。しかし、今日では、先生は学生に対して勉強以外の面でも熱心であったと感心しております。

その神谷先生があまりに唐突に逝去されました。先生をいつまでも鉄人と思っていた私には本心ショックでした。年齢的にも逝去されるにはまだ早すぎます。朝鮮半島情勢をめぐって余人をもつて代えがたい歯に衣着せぬ

論を展開して欲しいと今もって思います。しかし、現役の研究者として机の上に認めたばかりの原稿を残されたまま逝去されたことは、先生の最期の美学的表現であったのだと自分に言い聞かせております。

神谷先生。長いこと筆舌に尽くせぬご指導とお世話をいただきありがとうございます。衷心よりお礼を申し上げますとともに、ご冥福を祈念申し上げます。

群馬県立女子大学大学院
国際コミュニケーション研究科長
片桐庸夫

神谷先生に教えていただいたこと

一九七〇年春、神谷不二先生が慶應義塾大学に着任されたとき、神谷ゼミの一期生として先生の指導を受けることになった。先生の研究室で初めて先生の指導をうけたときのことを覚えている。先生は「資料や解釈はたくさんあるが、研究とは、古い資料を丹念に読み直して新しい解釈をするか、新しい資料を発掘するかのどちらかでなければならぬ」と静かにおっしゃった。先生の代表的な著書である『朝鮮戦争―米中対決の原形』（中央公論社）と『現代国際政治の視角』（有斐閣）は、ともに一九六六年に出版されたものであるが、先生の言葉どおりの著書であった。とくに、『朝鮮戦争』は、米国の資料を発掘し、すでにある資料を整理しなおし、立体的に朝鮮戦争に至る過程を再構成した上で、朝鮮戦争を開戦したのが北朝鮮であったことを説明し、当時の学界に波瀾を巻き起こした名著であった。事実を確定するための資料の追求、先行研究の整理、説得力ある文章、解釈

のバランス、どれをとっても、勉強する者への指針となるものであった。この書物を読んで研究を志した人も少なくなかった。

また、「研究は実務の分野に役立ててこそ本当の研究だ」というのが先生の口癖だった。国際政治に関心を持つ者であれば、ゼミ生としてすべて人を受け入れるという考えを持っておられた先生のゼミは、いろんな分野に関心がある人が参加していた。ゼミの時間では、若い学部の学生や大学院生が、政治思想の視点や比較文化論の観点から戦争論を論じたり、第二次世界大戦史を論じたりした。それぞれの発表と討論が終わった後、先生は、「それもこれも大事だけれど、ところでベトナム戦争の和平の行方を心配するほうが先ではないですか」と一言コメントされて、教室内が静まり返ったときのことを覚えている。先生は研究は提言に結びつかなければならぬという信念を持っておられた。実用主義を重んじる先生は、沖縄返還のときの学者グループの一人として学生の提言に参加された。日米欧委員会の委員としても活躍された。その頃、オピニオン雑誌、テレビ、新聞で先生の発言に接しない日はなかったが、多忙なときでも先生は、ゼミの学生の指導をしてくださった。先生は「政策

に役に立つ「大学人」という言葉を実践しておられたのである。
きたい。

防衛研究所統括研究官 武 貞 秀 士

一九七五年四月三〇日、ベトナムのサイゴンが陥落した日、先生は三田の研究室に急ぎ足で入ってこられて、「いま、サイゴンが陥落した」と、興奮した面持ちで院生たちにおっしゃった。政策分野への関心を持ち、国際政治の冷酷な現実を観察してこられた先生は、日常、書いてきたことが目の前で起きていることに、感情を抑えきれなかったのだろう。

先生の関心の対象は、近代イギリス外交史、日米関係、戦間期の国際関係、金日成体制と幅広いものだった。学部と大学院を通して先生の指導を受けた自分は、先生から朝鮮半島の政治構造の複雑さ、イデオロギーを排してありのままに朝鮮半島を見ることの大切さを学んだ。先生の勧めもあり、一九七五年、当時の防衛研修所（のち、防衛研究所と改称）にはいり、日本政府のシンクタンクの一員として、一九七七年、韓国に留学したり、中朝国境の視察をして報告書を書いたり、様々な国際会議に出て報告したりするとき、先生の研究に対する基本的な姿勢の大切さを思い出しながら、仕事をしたことを思い出す。先生から学んだことは、これからも大切にしてゆ

コロンビア大学での神谷先生

「齋藤君、博士課程修了後、日本にとどまっていなくて、米国でもカナダでもオーストラリアでもよいから留学してみませんか。」大学院博士後期課程二年目を終えた春、このように神谷先生がおっしゃった。そのとき先生は、さまざまな奨学金に応募するように勧めてくださった。しかし、どのように準備して良いのか皆目分らない。赤坂の日米教育協会に向いて説明を受けた後、とりあえずフルブライト奨学金に応募することにした。それまでに耳にしたことがなかった英語の試験 TOEFL も受けてみることにした。

フルブライト奨学金に応募するにあたり研究計画の提出も必要で、米国の大学院での研究計画書を作成し、先生のもとに持って行くと、三田の研究室で即座に「これではだめだ」とおっしゃった。ポイントがずれているというのである。早速書き直してフルブライト奨学金に応募した。もしも先生の的を射たご指摘がなかったならば、

書類選考の段階ではねられていたに違いない。先生のご指導に大変感謝している。

先生のご助言のおかげで、フルブライト全額給費奨学金を得て、一九七七年からコロンビア大学大学院政治学部博士課程に通算七年半余り留学し、そこでソ連外交、東アジア情勢、国際関係理論を中心に勉強することができた。特記すべきは、先生も同時期に渡米され、コロンビア大学にいらっしやったことである。先生は若い時にコロンビア大学やシカゴ大学で研究生生活を送られたことがあったので、とても嬉しそうに米国での研究生生活を満喫しておられた。

コロンビア大学には、先生が昔国際政治学を学んだ老齢のウィリアム・フォックスもおられた。フォックス先生は、「スーパーパワー」という言葉をつくった学者である。先生は「フォックス先生の英語は難解だ」とおっしゃっていた。

先生のご一家は、ニューヨーク郊外の高級住宅地の素敵な二階建ての家に住まわれた。ご招待され、笑子夫人心づくしの日本料理のおもてなしを受けたこともある。「勉強ばかりして体を壊してはいけない」などとおっしゃいながら、大学近くの中華レストランにも誘われたり

もした。土鍋に魚が入り中華味噌で味付けた砂鍋魚頭が先生の好物で、先生お気に入りの青島ビールを飲みながら、寒い冬の日、おいしく頂いたことが懐かしく思い出される。

先生の研究室はコロンビア大学の東アジア研究所のなかにあり、授業の合間によくお邪魔した。当時東アジア研究所には、ジェームス・モリー教授、ジェラルド・カーティス教授、エドワード・サイデンステッカー教授、ドナルド・キーン教授始め、錚々たる教授陣がいた。神谷先生が加わったことで、コロンビア大学の日本研究は一段と厚みを増した。同大学の教授たちも、「F u j i」と呼んで、先生に一目を置いていた。

先生は超一流の国際政治学者として日本で高名であったが、米国でも名が知られており、米国各地の大学に講演に行かれた。講演先からニューヨークに戻ってくると、その時のご体験を話してくださった。ヘンリー・キッシンジャーと対談され、そのときのインタビュ記事が日本の全国紙に掲載されたこともある。

欧州で開催される国際シンポジウムに出席する先生を見送るため、JFK国際空港まで行ったこともある。同空港で鳥の嘴のような先端が独特の形をした超音速旅客

機コンコルドにさっそうと乗り込まれたときのお姿が、目に浮ぶ。

忙しいスケジュールの合間をぬって、コロンビア大学のジムでジョギングをされていた。また、時折テニスを楽しまれていた。文武両道にたけた、とてもエネルギーッシュな先生であった。

週末にはニューヨーク在住の日本人を対象にしたテレビ番組に出演され、国際情勢を解説されたこともあった。留学生活が終わりに近づいたころ、先生は客員教授として再度コロンビア大学にいらっしゃった。コロンビア大学から博士号を得たとき、祝福して下さった。心暖かな方であった。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

杏林大学総合政策学部教授 斎藤 元秀

神谷不二先生の想出

神谷不二先生の講義を初めて受講したのは昭和五十四年の秋であった。当時の政治学科は日吉に国際関係の専門科目を二つ開講しており、一つが先生の国際政治論であった。先生はノートの類を一切持たず、満場の学生に向かつて理路整然と講義をされた。

先生は政治とは何かという問から始め、いくつかの概念を確認したのち、国際政治に切込んでいった。先生は政治における権力的契機を重視されたが、その分析視角は国際政治のあらゆる事象に対して一貫していた。特定の勢力を頭から敵視したり、あるいは美化したりする態度と、先生の講義は無縁であった。それゆえ先生の講義は爽やかだったし、先生の視角に必ずしも共鳴しない学生たちをも含めて、多くが先生を尊敬していた。

こうした授業をつうじて私は国際政治を学問的に論ずる仕事に魅力を感じていった。三田に進むと同時に先生のゼミに参加した。ゼミは輪読が中心だったが、なかで

も印象に残っているのは E・H・カー、ジョージ・ケナン、ルイス・ハレーなどである。楽しみは先生のコメントだった。複雑に絡み合った問題を鮮やかに切り捌いてゆく先生の手腕に、私たちはしばしば圧倒された。

大学院に在籍中、先生から手取り足取り的な指導を受けた記憶はない。先生はしかし、ときに鋭い言葉を発して研究を方向づけて下さった。やがて私はインドシナ研究に着手したが、対象の今日的な意義にいまひとつ確信を持ってないでいた。そのような折、先生は私に「キッシンジャーは二冊の回想録を書いています。朝鮮戦争以外にコリアは何箇所でもきましたか」と質問された。他人の基準に振り回されるなどという御趣旨であったのだろうが、不意の指摘に驚いたことを記憶している。

シンガポールで研究を始めた頃から、先生とのコミュニケーションの主要な手段は手紙となった。近況をお知らせしたり、抜刷をお送りしたりすると、先生は必ず返信を下さった。青インクで淀みなく綴られた文面は堂々たる達筆で、筆致は漢文の素養を漂わせていた。構成や配置のセンスも絶妙だった。かぎられたスペースに、いかにしてエッセンスを凝縮するか、そのことに常に神経を研ぎ澄ましておられたのではなからうか。

平成四年の春、金沢にある大学へ赴任しようとしていた私は、先生から念入りの注意を受けた。金沢はかつて旧制四高の置かれた北の都であり、四高はヨンコウではなくシコウである、というのがその眼目だった。先生は名古屋の旧制八高の御出身だが、同校は四高から遠征してくる南下軍としばしば対戦したという。往時を語る先生のお顔は生き生きしていた。私はこの「四高の町」で、先生を寿司屋や骨董店に御案内する機会を得た。

私は駆出しの当初から、自分が学生に与える注意の多くが先生の受け売りであることを自覚している。「どんなことでも世話になったら礼状を書け」「結論の明瞭でない論文を書くな」「報告の制限時間は必ず守れ」等々。それは現任校に移ってからも変わっていない。今年は本務のほかに三田でも講義を担当している。偶然にも先生が授業をされていたのと同じ第一校舎の二階の教室である。一月の下旬、先生から御手紙をいただいた。何年かぶりのお叱りの御手紙であった。返信の文面に頭を悩ませていた矢先に先生の訃報に接した。痛恨の一語であった。先生の求められたことについてか必ずお心えしたい。

山梨学院大学教授 小笠原高雪

インテリジエンスの人

神谷先生の論説を読み返して、その驚異的な分析力と先見性を再認識した。一九九〇年のイラクのクウェート侵攻に対して、依然として「希望（空想）的平和主義」が残る日本では、戦争は起きないという観測が多数派だった。先生はそれに組せず、「政府も戦争に備えよ」と警告されたが、生かされなかった。

冷戦の終焉によって、国家に代わってNGOや個人その他のアクターの時代が来るといった楽観論がもてはやされた時もこれを排した。冷戦終焉と時を同じくして登場した、ポール・ケネディ（『大国の興亡』）らのアメリカ衰退論にも反論し、その底力を指摘された。対テロ戦争では、タリバンを打倒してイラク戦争を始めようとしていた二〇〇二年秋にアフガニスタン問題は軍事力だけでは解決できない、イラク戦争は「大量破壊兵器の危険性を考慮に入れてもあまりに大胆な賭け」との評価だった。

いまや懐かしい、ソ連崩壊後の受け皿としてロシアが主導したが事実上短命に終わった独立国家共同体（CIS）についても、その脆弱性をいち早く指摘していた。また、明治維新、フランス・ロシア革命を例に、旧ソ連の指導者が一新されない限り、民主化も経済改革もないとして、「破れたポケットに経済援助する」ことに反対の論陣を張られた。プーチンらの KGB 出身者が牛耳る今日、この指摘は忘れてはならない。一九九〇年代に楽観論が台頭した北方領土返還についても、一貫して冷静（悲観的）な立場で、ロシアと北朝鮮の外交が共に「引き延ばし」であり、日本が国際的に孤立している現実を直視せよと喝破された。

一九九三年の非自民細川連立内閣を「同床異夢の野合」、日本新党、新生党、新党さきがけが競って党名に「新」を使ったことを「滑稽」と断じる。細川内閣は一年足らずで崩壊し、三党もすぐに消えた。

唯一、的中していないように見えるのが北朝鮮崩壊説で、先生は「ソフト・ランディング」（改革による体制維持）よりも「ハード・クラッシュ」の可能性が高いとの立場だった。ただ、ソフト・ランディングも実現していないので、決着はついていない。北朝鮮の崩壊を嫌っ

た中国と韓国の積極的支援に加えて、日米もコメ援助や無策と愚策（消極的支援）によって「加担」したのは、先生に限らずほとんどの人が計算外だったであろう。

そして、以下の分析も正しかった。北朝鮮が彼らの立場からすれば「合理的」に行動しており、自殺的な第二次朝鮮戦争を始めることはない。クリントン政権期から、米朝交渉が北朝鮮ベースで進んでいる。六カ国協議は失敗する。北の体制が変らない限り、拉致問題の解決もない。

先生は『朝鮮戦争』で初めて北朝鮮が南侵（開戦）したと主張し、当時の主流派の「進歩派」から人格攻撃まで受けたことはよく知られている。その後も時流や多数派に阿ねらず、少数派であっても正論を展開し、後年その正しさが認められた。アメリカに対しても、迎合も反発もせず、親米でも反米でもなく知米派であった。同世代の多くの日本の知識人と異なり、イデオロギーや偏見やドグマとも無縁で、歴史を踏まえ、二分法を押し、物事の本質を見極めた「インテリジェンスのお手本」でもあった。

東京工科大学准教授 落合浩太郎

神谷不二先生 略歴

昭和二年 一月六日生

昭和二〇年 三月

第八高等学校（旧制）文科甲類卒業

昭和二四年 三月

東京大学法学部（旧制）卒業

昭和二四年 四月

東京大学法学部助手

昭和二七年 九月

大阪市立大学法学部助教

昭和三四年 九月―三五年 六月

米国シカゴ大学国際関係学部フルブライト研究員

昭和三五年 九月―三六年 二月

米国コロンビア大学、戦争平和研究所客員研究員

昭和三七年 四月

大阪市立大学法学部教授 この間大学評議員、学部長を歴任

昭和四五年 四月

慶應義塾大学法学部教授

昭和五二年 九月―五四年 五月

米国コロンビア大学、東アジア研究所およびロー・スクール客員教授

昭和六〇年 九月―六一年 六月

米国コロンビア大学、東アジア研究所およびロー・スクール客員教授

平成三年 三月

慶應義塾大学を選定年により退職

平成三年 四月

東洋英和女学院大学教授 慶應義塾大学法学部客員教授（平成四年三月まで）

平成一三年 四月―一四年 三月

東洋英和女学院大学国際社会学部長

平成一四年 三月

東洋英和女学院大学退職

平成二一年 二月二〇日

逝去（享年八二）

学外兼務等 (慶應義塾大学退職後の主要なもの)

防衛学会会長 (平成五年―一三年一月)

国際安全保障学会会長 (平成一三年一月―一四年一月)

日本学術会議会員 第一六期 (平成六年―九年)、第一八期 (平成一三年―一五年)

文化庁国語審議会委員 第二〇期 (平成六年―七年)、第二二期 (平成八年―一〇年)

神谷不二先生 主要著作目録

一 著書

- | | | |
|-----------------------------------|-----------|-------|
| 『朝鮮戦争―米中对立の原形』 | 中央公論社 | 一九六六年 |
| 『現代国際政治の視角』 | 有斐閣 | 一九六六年 |
| 『教材 国際法及び国連憲章』 | 大阪市立大学教材部 | 一九六七年 |
| 『現代の戦争』（福沢記念選書七） | 慶應義塾大学 | 一九七三年 |
| 『戦後日米関係の文脈』 | 日本放送出版協会 | 一九八四年 |
| 『戦後史の中の日米関係』 | 新潮社 | 一九八九年 |
| 『アメリカを読む50のポイント』 | P H P 研究所 | 一九八九年 |
| 『朝鮮半島で起きたこと 起こること―分断・共存・統一の歴史と行方』 | P H P 研究所 | 一九九一年 |
| 『朝鮮半島論』 | P H P 研究所 | 一九九四年 |
| 『勝負の美学』 | P H P 研究所 | 一九九九年 |
| 『国際政治の半世紀―回顧と展望』 | 三省堂 | 二〇〇一年 |

二 編著書

- | | | |
|----------------------------|---------|-------|
| 『アジアの革命』（高坂正堯、尾上正男と共著） | 毎日新聞社 | 一九六六年 |
| 『沖縄以後の日米関係』（ジェラルド・カーチスと共編） | サイマル出版会 | 一九七〇年 |

『戦争と平和』(編)

東京グローリアンターナショナル 一九七一年

『日米経済関係の政治的構造』(永井陽之助と共編)

日本国際問題研究所 一九七二年

『日本とアメリカ協調と対立の構造』(編著)

日本経済新聞社 一九七三年

『朝鮮問題戦後資料』(編) 全三卷

日本国際問題研究所 一九七六年—一九八〇年

The Security of Korea: U. S. and Japanese Perspectives on the 1980's. Boulder, Colo.: Westview Press, 1980.

(Franklin B. Weinstein と共編著)

『現代の国際政治』(編著)

旺文社 一九八〇年

『北東アジアの均衡と動揺』(編著)

慶應通信 一九八四年

『二十世紀の戦争』(編著)

講談社 一九八五年

『アメリカ・ハンドブック』(佐伯彰一、荻昌弘、亀井俊介、高橋秀爾と共編)

三省堂 一九八六年

『現代の国際政治』(高橋和夫と共著)

日本放送出版協会 一九八七年

『改訂版 現代の国際政治』(高橋和夫と共著)

日本放送出版協会 一九九一年

三 翻訳書

A・シユトルムタール著 『ヨーロッパ労働運動の悲劇』(神川信彦と共訳)

岩波書店 一九五八年

ハンス・モーゲンソー著 『人間にとって科学とは何か』(監訳)

講談社 一九七五年

四 論文・評論

『「朝鮮半島」を解説する』

『諸君』一九九一年一月二月号

『国連への南北同時加盟が意味するもの』

『世界週報』一九九一年九月一〇日号

『北朝鮮の核』

『日本及日本人』一九九二年四月号

- 「日米関係の回顧と展望」
- 「中韓国交樹立で変る北東アジアの構図」
- 「過渡期世界のリーダーシップ論」
- 「憲法のここがいけない」
- 「世界を視る眼」
- 「冷戦への郷愁」
- 「日本は両極端のシナリオに備えよ」
- 「成熟せる対米関係への課題は何か」
- 「朝鮮半島にあるのは『危機』ではなく『機会』だ」
- 「『第二次朝鮮戦争近し!』の虚妄」
- 「金正日政権はやがて自壊する」
- 「金王朝終焉と東アジア」
- 「アメリカへの質問」
- 「国際情勢と外交の進路」
- 「日韓協調の再出発に望むこと」
- 「アメリカが沖繩を捨てる日」
- 「韓国と北朝鮮の現状」
- 「明るい展望をもてない北朝鮮情勢」
- 「日米韓に警告する『糞土の』北朝鮮につけこまれるな」
- 「朝鮮半島情勢の行方を考える」
- 「世紀末妖怪ムティグスの跳梁」

- 『新防衛論集』第一九卷第四号 一九九二年三月号
- 『世界週報』一九九二年九月一五日号
- 『エコノミスト』一九九三年一月五日号
- 『諸君』一九九三年四月号
- 『新防衛論集』第二一巻第二号 一九九三年九月号
- 『諸君』一九九四年二月号
- 『世界週報』一九九四年二月八日号
- 『革新』一九九四年五月号
- 『エコノミスト』一九九四年五月二四日号
- 『諸君』一九九四年六月号
- 『世界週報』一九九四年八月二日号
- 『諸君』一九九四年九月号
- 『新防衛論集』第二三巻第一号 一九九五年七月号
- 『日本及日本人』一九九六年一月号
- 『世界週報』一九九六年五月一四日号
- 『文藝春秋』一九九六年一月月号
- 『国連』一九九六年一月月号
- 『商工ジャーナル』一九九七年一月号
- 『諸君』一九九七年五月号
- 『問題と研究』一九九七年九月号
- 『諸君』一九九八年一月号

「今後の中華人民共和国と台・日・米の対応」

「対米発言力を強化するには憲法問題の解決が急務だ」

「プッシュ米政権の外交政策と日米関係」

「プッシュ政権と対アジア政策」

「国際政治学徒の半世紀」

「国際政治の半世紀」

「フェアプレー」

「東京大学特別学生」

「日朝交渉を考える」

「『戦後総決算』の好機」

「朝鮮戦争をしかけたのはどっち?」

「小泉再訪朝と半島情勢の現状」

「六カ国協議 誰も困らない停滞」

「『太陽政策で南北統一を実現してみせる』と言われたら

「『日米安保改定に反対したのは正しかった』と言われたら」

「海上自衛隊幹部学校」

五 『産経新聞』 正論

「機なお熟せず、延期が最良」

「指導者が一新されない旧ソ連」

「安定時代での『韓国病』克服」

『アジアレポート』一九九九年九月号

『テームス』二〇〇〇年三月号

『世界週報』二〇〇一年一月一六日号

『アジアレポート』二〇〇一年三月号

『世界週報』二〇〇一年五月一九日号

『三田評論』二〇〇一年一月号

『正論』二〇〇二年四月号

『文藝春秋』二〇〇二年八月号

『アジア時報』二〇〇三年一・二月号

『日本文化』二〇〇四年冬号

『文藝春秋』二〇〇四年一月

『アジア時報』二〇〇四年五月号

『Voice』二〇〇五年一〇月号

『諸君』二〇〇六年四月号

『諸君』二〇〇六年七月号

『文藝春秋』二〇〇九年四月号

一九九二年 四月一八日

一九九二年 六月一三日

一九九二年 二月二四日

- | | |
|-------------------|--------------|
| 「再生への底力を引き出せるか」 | 一九九三年 一月三〇日 |
| 「日米で目立つ価値観の相違」 | 一九九三年 三月一〇日 |
| 「UNTAACの努力にも限界」 | 一九九三年 五月一二日 |
| 「非自民連立に感じる矛盾」 | 一九九三年 八月二日 |
| 「山花訪韓と非永田町の常識」 | 一九九三年 九月一〇日 |
| 「韓国と対等地位を求める北朝鮮」 | 一九九三年 二月二二日 |
| 「北朝鮮問題の誤謬を正す必要」 | 一九九四年 五月一〇日 |
| 「『非金日成化』が歴史法則」 | 一九九四年 七月一四日 |
| 「無神経な米国の単独主義」 | 一九九四年 八月一七日 |
| 「当分混迷を脱し切れない世界」 | 一九九五年 一月一日 |
| 「元首不在国と重要協約の幼稚さ」 | 一九九五年 五月一九日 |
| 「北朝鮮ベースのコメ援助交渉」 | 一九九五年 七月五日 |
| 「いずこも常軌逸した常識外れ」 | 一九九六年 三月六日 |
| 「アセアン・マフィアよ驕るなかれ」 | 一九九六年 五月一〇日 |
| 「強権政治と民主主義」 | 一九九六年 八月九日 |
| 「ボタンのかけちがえ」 | 一九九六年 二月五日 |
| 「イデオロギーは消滅したか」 | 一九九七年 五月八日 |
| 「『G8』での日本の立場ぜい弱に」 | 一九九七年 六月二四日 |
| 「駐日大使論」 | 一九九七年 八月二二日 |
| 「終わりの始まり」 | 一九九七年 一〇月二三日 |
| 「金大中氏の4つの顔」 | 一九九八年 三月一九日 |

- 「『する外交』と『しない外交』」
一九九八年 四月二五日
- 「政変二論―政権交代にあたって」
一九九八年 七月二〇日
- 「『バイアグラ』比較文明論的考察」
一九九八年 二月一〇日
- 「国民の目は醒めていた」
一九九九年 一月二二日
- 「アメリカの北朝鮮政策批判」
一九九九年 四月一六日
- 「平壤の高笑いが聞こえる」
一九九九年 七月八日
- 「現代中国二論」
一九九九年 一〇月一九日
- 「コンボ戦争の残したものの」
一九九九年 二月一五日
- 「台湾民衆の帰属意識」
二〇〇〇年 四月二日
- 「『遠慮』をもって事に当たれ」
二〇〇〇年 六月一八日
- 「日韓協調に限界ありとみた」
二〇〇一年 二月三日
- 「北朝鮮の路線転換は不可能と見る」
二〇〇一年 四月二四日
- 「『三重の停滞』に陥った北朝鮮」
二〇〇一年 七月一三日
- 「『唯一の超大国』に悩むアメリカ」
二〇〇一年 九月二九日
- 「テロ制圧にただ乗りは許されぬ」
二〇〇一年 二月三〇日
- 「テロに潰された朝鮮問題」
二〇〇二年 二月一〇日
- 「『北朝鮮原理主義』の命運は？」
二〇〇二年 四月二七日
- 「対露外交にも構造改革が必要だ」
二〇〇二年 七月三日
- 「保守の復権が意味するもの」
二〇〇二年 九月七日
- 「アフガン・イラク・パレスチナ」
二〇〇二年 二月九日
- 「北朝鮮を修復不能にした男」

- 「韓国新政権と小泉路線の協調と矛盾」 二〇〇二年二月二七日
- 「平和と戦争の二分法を排す」 二〇〇三年四月二二日
- 「北の瀬戸際戦略はもはや通用せず」 二〇〇三年九月四日
- 「六〇年安保当時の日本に重なる韓国」 二〇〇三年一〇月一六日
- 「中国の長期高度成長神話は本物か」 二〇〇三年二月二七日
- 「核廃棄と体制保証は取引できず」 二〇〇四年二月一日
- 「金正日を延命させた韓国総選挙」 二〇〇四年四月二〇日
- 「見落とせぬ首相再訪朝の国際環境」 二〇〇四年五月一七日
- 「ウソに蔽しい米国人の心は何処に」 二〇〇四年七月一五日
- 「韓国に育つ親北路線への憂国ムード」 二〇〇四年九月二七日
- 「親中派と戦後進歩派に見る相似性」 二〇〇四年二月二五日
- 「虚妄と幻想に満ちた六カ国協議」 二〇〇五年二月二五日
- 「日中間には関係悪化の歯止めなし」 二〇〇五年四月二八日
- 「誰も困らない六カ国協議の停滞」 二〇〇五年六月二六日
- 「変化した六カ国協議の内部枠組み」 二〇〇五年八月二二日
- 「六者合意は実相の見極めこそ重要」 二〇〇五年九月二八日
- 「盧武鉉外交の重大なる矛盾と限界」 二〇〇五年十二月一日
- 「北の正常化なく日朝の正常化なし」 二〇〇六年一月三〇日
- 「ザ・デイ・アフターを視野に入れよ」 二〇〇六年三月三〇日
- 「樂觀許されぬ拉致の国際連携拡大」 二〇〇六年五月二六日
- 「国際政治の動向判断で肝心なこと」 二〇〇六年八月二一日

「新政権が対北政策で心すべきこと」

「アメリカの対北政策に落胆」

「六者協議の不毛の連鎖を断て」

「六者合意の『譲歩圧力』に屈するな」

「核ならんと欲すれば拉致ならず」

「米の核融和政策と拉致強硬策の両立」

「北の核『無能力化』の虚妄」

「六六歳になった金正日の今」

「イデオロギーから『実利主義』へ」

「北独裁の3代世襲は難しい」

「『核』と『拉致』の日米ギャップ」

「複眼で視るオバマ政権と世界」

二〇〇六年一月二日

二〇〇六年一月二三日

二〇〇七年一月四日

二〇〇七年二月二六日

二〇〇七年五月一八日

二〇〇七年八月一〇日

二〇〇七年二月六日

二〇〇八年二月二〇日

二〇〇八年六月二二日

二〇〇八年八月一日

二〇〇八年一〇月一七日

二〇〇八年二月三一日

附記 今回掲載した近時の略歴については、東洋英和女学院大学教授増田弘先生にご教示戴いた。また論文と評論について

は、神谷不二先生が慶應義塾大学退職後に発表された主なもののみ掲載した。本目録作成にあたっては、東京工科大学の

落合浩太郎准教授の全面的な協力を得た。記して厚く御礼申し上げたい。神谷先生の慶應義塾大学退職以前の時期の詳細

な著作目録は本誌第六五卷第二号(一九九二年二月)および『神谷不二研究会二十二年史』(慶應義塾大学法学部神谷不二

研究会刊、一九九一年一二月)に収録されている。

(赤木完爾記)